華やかな駅

華やかな駅

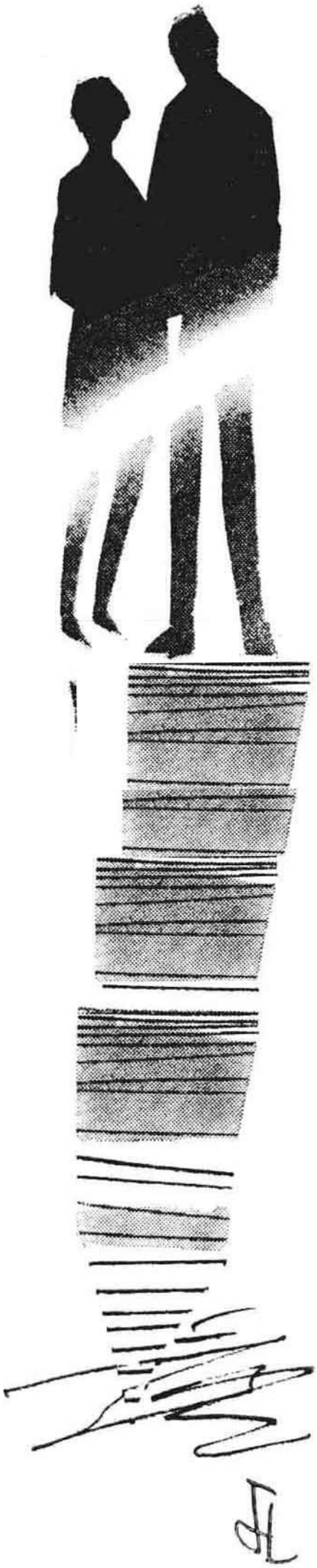
昭和四十五年四月五日　印刷
昭和四十五年四月十日　発行
《検印省略》

定価　三四〇円

著者　俵　萠子
発行者　豊島　澂
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話　東京（二九一）〇二三八番
振替　東京　一二九一三番

落丁・乱丁は成取替いたします。
0093—046702—2265



長篇小説

華やかな駅

俵　萠子

目次

夏の旅　7

東京の秋　52

みじかい季節　90

あかるい島　136

暗い原野　196

旅立つ時に　233

装幀・司　修／挿画・吉原澄悦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

華やかな駅

夏の旅

1

倉沢三紀は、向かいのビルの内部に、目をあてていた。

そのビルの五階が、なんという会社であるか、三紀は知らない。しかし、三紀の席から視線をあげると、いつもその会社は、そこに存在していた。

会社は、二部屋に仕切られていた。一部屋には、明るい螢光灯がついている。部屋は広くて、螢光灯の下を三〇人くらいの人間が、歩いたり、立ちどまって話をしたり、机にかがみこんだりしていた。いつも人々は忙し気であった。三紀は向かいのパントマイムの動きを見るたびに、彼らの目にもこちらがそう映っているのだろうかと想像する。だが、いままでにただ一人を除いて、そんな想像をしていそうな人物を見かけたことはなかった。

例外の人物は、若い、三紀くらいの年齢の女性である。螢光灯の大部屋ではなく、仕切られた隣の部屋に住んでいた。

どういうわけか、その部屋には昔ながらの白熱電球がついていた。部屋全体が薄暗い。資料室か、調査部であろうか。書架が四列に列んでいる。窓際に机がひとつ置かれて、その女性は、窓に向かってすわっていた。

彼女は、いつも机にかがみこんで、何か書き物をしていたが、時々三紀のほうを眺めることがあった。いや、三紀を眺めるというよりか、彼女の視線が上がると、それは三紀の方角にな

るといったほうが正しい。
じっと窓外を見つめているときの彼女には、会社からも同僚からも、ビジネスからもふらっとさまよい出た、異邦人のような風情があった。
——そう思うのは、わたしの気のせいかも知れない。あのひとはただ窓の外の景色を眺めているだけかも知れない。
しかし三紀は、自分と同じ時間、同じように異邦人である彼女に、いつとはなくほのかな親しみさえ感じるようになっていた。
(オヤッ)
と三紀は思った。
——ひとが変わっている。
きのうまで、たしか彼女は、長い髪をきれいにアップに結っていた。面長な顔立ちであった。が、いま、こちらに体を向けてすわっているのは、水前寺清子みたいに髪を短く刈った、丸顔の女性である。
——あの人が、居なくなった。
倉沢三紀は奇妙な動揺を感じた。もう一度見た。しかし、やはり女は別人であった。
三紀の頭に、生々しく一つの場面がよみがえる。
それは、半年ぐらい前の、やはりいまごろの時間であった。もうすぐ終業になろうとしていた。日の短い季節であったから、ビルはもう夜に包まれていた。
向かいの彼女の部屋に、ワイシャツ姿の背の高い青年が入ってきた。青年が彼女に何か話しかけた。彼女は立ちあがると、書架を回りはじめた。本をさがしている。青年も書架をのぞいていた。四列ある真中の書架を、彼女と青年が、書架をはさんで奥のほうに移動してゆき、お互いに裏側へ回ろうとしたとき、二人が正面からぶつかりあう姿勢になった。よろけた彼女のからだに、青年のワイシャツの腕が伸び、両脇を

ささえた。
青年の腕が、強く彼女をひき寄せたように、三紀には見えた。二人の姿が、書架の厚みのなかに入って見えなくなった。少しの時間がたった。
やがて、彼女がくるっと青年に背を向ける動作が見えた。青年は、静かな歩調で部屋を出ていった。
それだけのことだった。書架の厚みの向こうで何があったかは知る由もない。
しかし、この事件は、三紀にいっそう彼女への親近感を強めさせた。彼女と三紀が、ひとつの秘密を共有したような感じがしたのだ。もちろん三紀は、そのことを同僚のだれにも話さなかった。おそらく目撃したのは、三紀一人である、という確信に似たものがあった。
――ささやかな、小さな事件は、実を結んだのだろうか。相手は、あの時の、あの青年だろうか。
そうであってほしいと三紀は思う。
孤独な窓際のあの机から、彼女が脱出したことを、祝福せねばならぬ。しかし、奇妙な動揺は三紀のなかにまだ尾をひいていた。
それは非常に親しい人間が結婚したときの一種のさびしさに似ていた。ビルのなかの孤独を分けあう相手を失ったさびしさにも似ていた。

「夕刊！」
部厚い新聞の束が、三紀の机に投げ出された。
一日の最後の雑用である。三紀のいる総務部の庶務には、新聞が二部ずつ配達される。一部を揃えて部長の机の上に、残る一部を綴じ込む。
立ち上がろうとしたとき、電話が鳴った。
「三紀ちゃん？　あしたどうなったの」
矢上景子からだった。そういえば、矢上景子への電話連絡を忘れていたことを、三紀は思い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出した。
「ごめん。うっかり忘れていました。あしたやります。午後一時。銀座のカーム」
「岡本さんは？」
「いけるそうよ」
「じゃあ」
景子はいそいでいるふうだった。
倉沢三紀と岡本栄子、矢上景子の三人は、高校時代からの友だちである。ここ三年、いっしょに旅行してきた。本格的な山登りやスキーは面倒だが、気ままな旅は好き、という点で三人は気が合った。一年に二、三回旅に出た。
電気部品メーカーで、従業員五〇〇〇人、まず大企業といえる会社につとめる三紀と栄子は休暇がとりやすいが、従業員一二〇人ばかりの小さな不動産会社に勤める景子は、休みがとりにくい。三人で約束していても、三紀と栄子だけになってしまうこともある。
だが去年は、春に志摩へいったきりだ。ことしの正月は、矢上景子の都合が悪かった。M証券の新宿支店につとめていた景子が、恋愛問題で退社し、新しい職場を見つけなくてはならなかったからだ。春には奈良へいこうという計画があった。しかし、そのときは、岡本栄子が見合いをするのでだめになった。
毎月、サラリーから一〇〇〇円、ボーナスから三〇〇〇円積みたててきた旅行貯金は、ことしの夏のボーナスも含めると、一人当たり二万二〇〇〇円になる。明日はその金で、一年越しの大旅行プランを持ち寄ろうという日であった。
立ち上がって、新聞の綴じこみを運んだ。いつも、綴じる前に、見出しにだけ目を通すことにしている。
ぱらぱらめくっていた三紀の目が、S紙のレジャー面の片隅に固定された。
〈さい果ての旅情〉

と書かれている。

〈荒涼たる根釧原野〉

とサブの見出しがついていた。

黒っぽい一枚の写真がかたわらにある。写真としてはまずかった。暗くて、構図もおかしい。荒れた沼のように暗い地表から、おびただしい樹木が空に向かって突き立っている。樹木といったが、手前は荒々しく切りとられ、遠くのものは、葉もなく枝もなく、幹だけになって天を突いていた。

立ち枯れたトド松の大群であった。画面の上部にはりついたように、一筋、鈍く光るものがある。川か、入江か、湖か、三紀には見分けがつかなかった。

写真説明を見る。

〝北海道野付半島〟とある。

だとすれば、これは、太平洋であろうか。しかし、その海は、かつて三紀が見たどの太平洋とも趣きがちがっていた。植物も人間も、あらゆる生命をもつものを拒否する冷酷な表情だ。不機嫌なたたずまいで、海は灰色に横たわっている。

いっさいの妥協を容赦なく拒否する、不毛の原野と海が、三紀をとらえた。何か痛烈な一撃を脳天からくらったような戦慄が走った。

立ち枯れたトド松が、自分であるような錯覚も起きる。

——お前のように妥協だらけの、ふやけた人間はこうしてやる。

海と原野は、そういった。

——うち込む仕事も持たず、傍観者の姿勢で自己欺瞞し、はげしく燃えもせず、傷つくことをおそれ、ほどほどに帳尻をあわせて人生を送ろうとするお前は、こうしてやる。

荒々しく海と原野がいった。

（いいえ。ちがいます。わたしはあなたに負け

ない生きかたを求めています。けれど、まだわたしにはそれがなにか見つからないのです）

三紀のどこかで、小さくつぶやく声があった。

弁解がましい小さな声ではあったが……

（鍛えてください）

別の声がいった。

（あなたのなかに身を置きたい）

その声は、もっと大きく叫びはじめた。

――行ってみたい。

と、三紀は思った。ここよりほかに行くべきところはない、という決まりかたであった。

赤い手帳の最後のページに、三紀は旅費とコースをうつしとった。

不思議にすがすがしい後味だった。

もう一度、向かいのビルの窓を見る。資料部の電気はすでに消え、螢光灯の部屋だけが眩しい。人々は相変わらず忙し気に動いていた。

ふと思いついて、三紀は、有近宗正に電話をかけた。

「もしもし、おじさまですか」

と三紀はいった。

「倉沢三紀ちゃんか。珍しいな。よほどおひまと見えますな。わたくしごとき者のところへお電話くださるとは……」

有近宗正が答えた。

三紀が有近にはじめて会ったのは高校時代だから、もう六年越しのつきあいになる。従兄の倉沢正二郎が、三紀を有近にひきあわせた。有近の本職は、T自動車の調査室勤務だが、趣味でレコードクラブを主宰している。従兄の正二郎の紹介で、一時三紀もその会に籍を置いていた。有近は、父のない三紀のために就職まで世話してくれた人物である。

「また、そんなことをおっしゃる。お忙しいでしょう」

「いや、ひまでひまでしかたがない。わたくし

はいつもひまです。とくに若い女性のためなら、いつもひまです」
例の退屈そうな声がかえってきた。
「お願いがあるんです」
「お願い？　そいつはうれしいな。若いお嬢さんから、お願いといわれると、とたんに背筋がシャンとしてきて――」
「あの、北海道のご本をお借りしたいんです」
有近の冗談にはとりあわず、三紀はいった。
「なんだ、そんなことか」
と有近宗正は笑った。
「そんなことで、すみません」
三紀も笑うと
「日本全国、いや世界各国、おのぞみのところへ、たちどころにご案内しますよ。北海道だけでよろしいですか。なんでしたら、サウジアラビアでも……」
「いえ、北海道だけで結構です。ついでに、北海道について、お話もうかがいたいんですが」
「いつです？」
「きょう」
「きょう？　これから？」
それから少し間をおいて
「相変わらず、せわしい人だね、キミは。また、なにか思い立ったな」
しかたのない子だ、という調子で有近はいった。
「すみません。いつも思い立ってばかりいまして……」
何年か前、三紀はある日突然、スチュワーデスの試験に応募してみようかと思い立ったことがある。有近の世話してくれた会社をやめるなら、まずかれに相談すべきであると思った。三紀にとって、有近は父と兄の中間のような存在である。年齢もそんな年だ。四十歳である。忙しくても、忙しそうな顔をしない有近を、三紀

は尊敬していた。スチュワーデス志望事件のときは、有近から軽く一蹴された。
「あれは、空のウェートレスじゃないか」
「でも……」
「くだらん。やめなさい。それくらいなら地上のウェートレスのほうがなんぼかいい。死ぬ危険がないだけでもな」
と有近はいった。いい出したら有近宗正は頑固である。パイプをくわえて、とりつくしまのない顔をする。三紀は諦めた。
「よろしい。今夜いらっしゃい。ぼくは八時ごろ帰る」
いったん帰宅して、三紀は花模様のドレスに着かえ、半袖のサマーセーターを羽織って、二駅離れた有近の家にいった。
レコードと旅が趣味の有近の本棚には、北海道関係のものが数冊あった。そのうち二冊を、三紀は借りた。
「研究したら、電話しなさい。助言してあげる」
と有近宗正はいった。

2

地下鉄の西銀座でおりると、倉沢三紀は裏通りを歩いた。矢上景子や岡本栄子と約束した喫茶店カームは、銀座といっても築地よりのはずれにある。新しくできたビルの地下で、いつも客の少ない店だ。
株式課の岡本栄子が三〇分くらい遅れるというので、三紀はさきに社を出た。
矢上景子はまだ来ていない。白いシートにすわって、カレーライスを注文した。ゆうべ有近から借りた北海道の本を二冊ひろげてみる。ほかに客は、若い男が二人。一人は白いワイシャツで、一人はグレーと白の縦縞のシャツを着ていた。二人が同時に三紀を見つめた。
おんな一人喫茶店にいるというムードを、三

紀は好きだが、こんなときタバコが吸えたらいいと思う。無遠慮に注がれる男たちの視線に、さり気なく対抗できるような気もする。三紀は、いつも一人になりたい欲求と、一人の心細さをおそれる気持がなかばしている。そして結局は、心細さというか、手もちぶさたをおそれる気持に負けて、だれかと行動をともにしてしまう。あとで、一人で行けばよかったと思うことがしばしばある。いい映画をみたあとなど、とくにそう思う。

本のグラビアのなかに、切り立った海岸線の写真が一枚あった。カラーでないせいもあろうが、海岸線は木一本ない岩の壁に見える。奇怪な形の岩が海に突き出て、しぶきをあげた海は、一面に白い。

〈海は荒く、断崖そばだって、人をよせつけぬ知床半島〉と説明がある。

——知床

と三紀は、口のなかでゆっくり発音してみた。美しい語感。旅情が胸をしめつけてくるような地名だ。

ブルーの半透明のドアから、矢上景子が入ってきた。

「ごめん、ごめん、遅くなって……。仕事が片づかなかったものだから。暑いわね、六月だというのに……」

景子の白いブラウスの脇に、汗が黄色っぽいシミをつくっている。鼻の上のファウンデーションがむらになっている景子の顔を、三紀は疲れているなと思った。

「目的地、決めた？」

せかせかした調子で景子がいう。

「うん。それより、どう？」

「どうって？」

わかっていて、景子がききかえす。

「あのひとのこと」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com